

実践プラン例（４）

災害時に逃げ遅れる人をなくすために！

<エピソード>

公民館職員 A さん。南海トラフ大地震の話題になるたびに、公民館によく来館してくる高齢者の人たちのことが心配になります。そんな時に利用者の会話が聞こえてきました。

B さん「先月行われた避難訓練、参加者が少なかったらしいで」

C さん「そうか、自治会の防災・防犯部のメンバーは少ない人数で一生懸命考えて取り組んでいるみたいやけど、防災への関心が低いのかなあ。」

D さん「そうやな。自力で逃げることができない人が家族にいないと、危機感がないだろうし、あまり関心ないかもなあ」

こんな会話を聞きながら、企画のイメージがわいてきます。

ここがねらい

災害時要援護者に対する支援に関心をもつ人を増やす。

○概要

多くの人が集まるフェスタ等で防災の基礎知識や自力で避難できない人（要援護者）がいることを知ってもらう。また、災害時要援護者に対する支援を学ぶとともに実際に支援体験してもらう。

参加者：地域住民
実施場所：公民館等社会教育施設、学校



4つのステージ

気づきを促す

学ぶ機会をつくる

情報提供する

できること気になることから始める意識の醸成

取組内容

◆地域で開催されるフェスタ（自治会主催）の中で防災〇×クイズを実施

災害が起きる前の備えや災害が起きた時に身を守る方法をクイズ形式にして簡単に学ぶ。

○気づく

「災害にあっても家にいれば大丈夫だと思っていたけど、家の中にも危険なことは多くあるんだなあ。そう考えると近所に住む両親のことが心配だなあ」

◆公民館が「地域防災に関心をもつ人を増やす」ことを目的とした講座を実施

- ・災害時に予想される被害や、防災に関する知識を学ぶ。
地震や風水害についての映像等を交えながら臨場感をもって学ぶ。
- ・災害時要援護者が抱える困難を学ぶ。
東日本大地震時等に、避難時や避難所で、要援護者に降りかかった困難の事例を通して、要援護者支援に必要な知識を学ぶ。

○学ぶ

「避難所まで一人で行くことができない人にとっては支援の体制がないと不安だろうなあ」
「災害時要援護者に対して、必要な支援や配慮はなんとなく分かったけど、実際の災害時に何かできるのかなあ」

◆災害時要援護者避難訓練等の情報発信

講座参加者に対してメールで災害時要援護者避難訓練や避難所一日体験の情報を発信する。

○知る

「災害時要援護者に対する支援体験できる場があるんだったら、実際にやってみないと不安だし、行ってみようかなあ」

◆災害時要援護者避難訓練等を体験

災害時要援護者避難訓練や避難所一日体験などに参加し、災害時要援護者に対する支援を体験する。

- ・車椅子を押したり、身体を支えるなどしながら、避難所まで一緒に行く。
- ・要援護者に対して日常必要な支援（移動や介助など）を体験する。

○始める

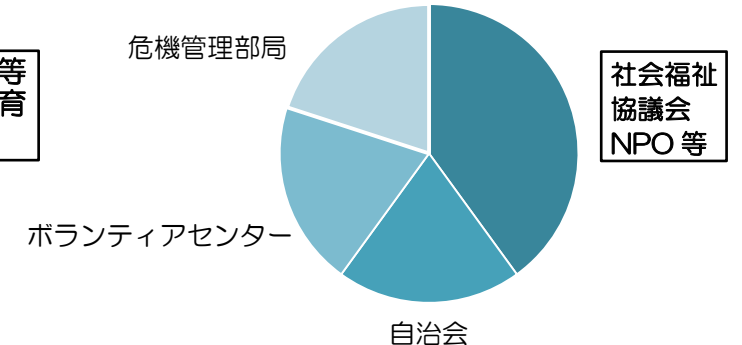
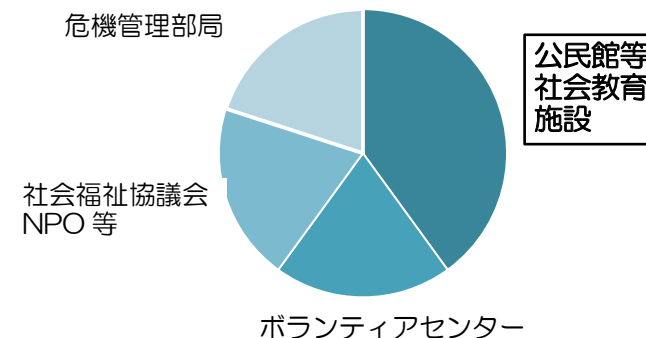
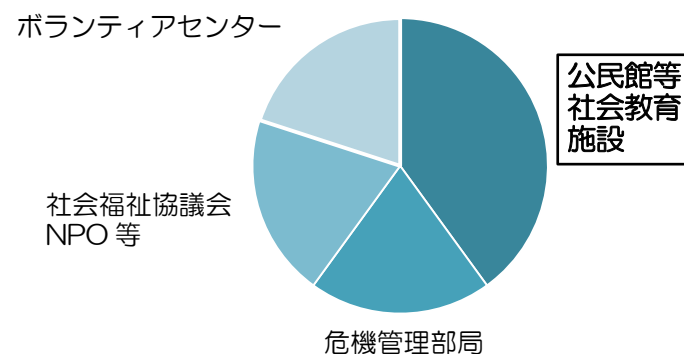
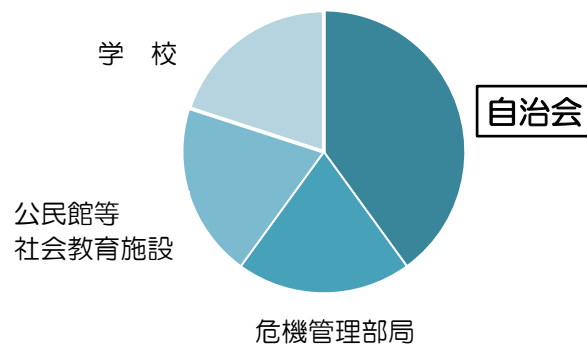
「体験してみてわかったけど、話したこともない人に支援するのは色々課題があるんだなあ。話せる関係が大事なんだなあ」
「支援を求めている人が少しわかったし、見かけたら声をかけてみよう」

つぎへの工夫！ クイズの回答用紙の裏に講座のお知らせを掲載する。

つぎへの工夫！ 講座のアンケート等に必要情報が流せるようにメールアドレスの記入欄をつくる。

つぎへの工夫！ 情報を流す際に、関心を高めるため要援護者支援の体験談も同時に提供する。

関わる団体と役割分担のイメージ



参加者の気持ちの変化